大正十三年四月三日印刷　大正十三年四月　日第三種郵便物認可
大正十三年四月五日發行（毎月一回一日發行）

婦人と勞働

職業婦人改題

四月號

Vol. II. No. I THE FUJIN TO RODO April, 1924

婦人と勞働

第二卷第一號



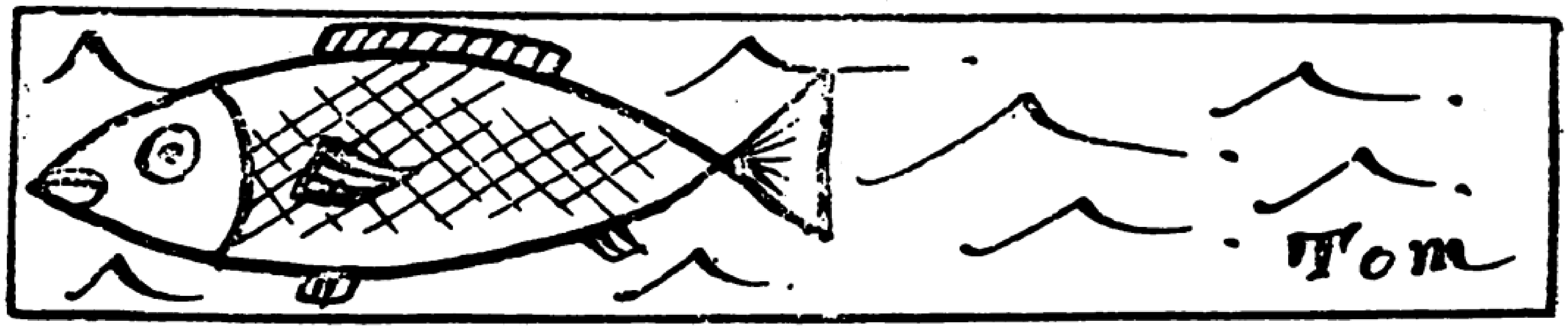
奥むめお女史著

婦人及性問題十六講

近刊

一　原始時代及び歴史上における婦人の地位
二　婦人問題の意義及び發生
三　宗敎と婦人問題
四　近化文藝に現れたる婦人問題
五　女性中心説
六　フェミニズムとフェミニニズム
七　新女性主義
八　優生學と新マルサス主義
九　性的研究の對象としての婦人問題
十　婦人と社會生活
十一　法律に現れたる婦人の地位
十二　婦人參政權問題及び其の運動
十三　母性と兒童問題
十四　社會主義主張と婦人
十五　勞働問題と婦人
十六　勞農露國における婦人の現狀

東京牛込矢來三　新潮社　振替（東京）一七四二



婦人と勞働　四月號



來るべき時代の婦人

新居格

一

概しての婦人は――男性だつてそうでなくはないが――幸福をこひねごふ。その願ひは漫然たる心持であるに過ぎない場合が多いのであらう。しかし、それは人間特に婦人特有の本能的情緒である。幸福の内容は人に依つて範圍こ程度こが異ならうけれごも何れにしても彼等がそれ〴〵の心に幸福こするものにちがいない。何のために幸福を欲するかを思索して幸福であらねばならぬと結論するがためでない。若しも彼等が幸福を彼等自分の漠然たるあこがれに止めずして思索的にも人々が幸福であらねばならないこゝに推論が出來うるならば、その場合は個人意識から社會意識に當然の推移を取るものなるが故に幸福の希求も理論的になればなるほご歡迎されうる。

しかしながら社會多數の女性はたゞ漫然たる幸福をあくがれてゐるかに見える。少女が窓によりて夢みる根據なき

夢である。そうしたものが個人意識以外に一歩をも踏み出しえないのは當前の話である。

女性の地位の薄弱はそれの地位が隷屬的であることから來る。しかし隷屬的の地位にあるかぎり彼女たちがどんなに幸福なそして多彩な雰圍氣にゐるにしてもそれは本當の幸福でありえない。住むことのどんな氣持よさがあつても着ることや美を裝ふ自由な時間があり享樂し空想する快適があつても譬へばお伽話に出て來る綺麗な王女のやうでありえてもそれは黎明期に立つ近代女性の幸福であろうか。

通俗向家庭小說に數々描かれてある安價なローマンチックな情趣が勞働を生活基調とする新社會を目差す女性に何の交涉があらうぞ、然し乍ら今の多くの女性はまだ根本的に事象を觀照すべく習慣付けられてゐたに過ぎる感がある。

女性が甘美なセンチメンタルな時に、或は音樂や美術に、一時流行した言葉で云へば文化生活の色模樣たるあらゆるものに生活基準乃至觀念を置く以上に深かい思索の追付が乏しいのを我々は遺憾としない譯には往かね。

更に具體的に云ふであらう。住宅を最もよき材料を以つて、最もよき樣式に築造しそれに配するあらゆる意匠を加へた室內裝飾とあらゆる家具とを以つてした所で、それが何であらう。幸な夢をやすらかな美しい睡眠に宿ごし朝明けの白光が徐々に黃金色の光線に代はつて行くやうに、靜かにして氣持のいゝ目覺めを味ひ、朝餐、晝餐、晚餐の美食、社交、讀書、趣味、化粧、服裝、享樂、陪待この凡べてが心にかない夫は知識と德性と秀麗と愛に充ち、子女は人形のやうに可愛らしいとしてさて、女性はそれだけでそこに地上の樂園があると云へやうか。

云へると見るものは最も恐るべき錯覺の世界に住むものだ。何故かならば解剖せよ。而しその場合解剖のメスは女性の地位が果して隷屬のそれでないかあるかであらねばならぬ。換言せば女性が人形であるかないかであり、婦人の社會的着目が社會意識的關涕をどれ丈もつてゐるかどうかであるべきだと思ふ。

個人的乃至家族的幸福の空想に心を耽けらすものは侮蔑さるべき時代で今はある。

女性が何から何まで男性にたいして隷屬的でないところの全然對等な地位の復活を要求するのが近代女性の叫呼であるとすれば、女性は何に思考の鋒先を差向けねばならぬか。

それはまさしく從來の女性を取卷いてゐた情感本位の既成觀念から脫却しなければならぬことである。私は近代女性のために詩と音樂と夢と戀愛とをそのためには斷じてすゝめない。私は先づ理性と知識とをすゝめる。知識特に科學的精神と社會組織の研究をすゝめる。詰り、現實に立脚することである。現實主義の受洗から出發する所の社會批判であらねばならぬことである。

　展望がその脚地から放たれるとき一切の觀念がどんなに急轉化するかを知るであらう。新社會に入る黎明の路はそれより外にはないと私に信ぜられる。

隸屬婦人の奴隸道德の上に花咲いた一切の既成觀念を根こそぎ打壞し去ることなんだ。

そうした破壞の石礎から女性の新倫理觀が初めて組織の緒口を見出すだけだと思ふ。

　曾つての日詩集を置いた机に今唯物史觀の一本を置きかえよ。何故過去の歷史的開展がいつの間にか婦人に隸屬の地位を投げ與えたかの理由と而して現存の社會組織も今尙ほそうであるかの不當な事情を理解すべきである。

二

　職業婦人は女性のために奴隸道德に抗議しうる第一線に立つものであらねばならぬ。彼等にも女性特有の優婉なる情緒はある。從つて雛罌粟のやうな纖麗な夢も描きうるであらう。しかし夢に頰擦りするためには彼等には街頭の風塵があまりに強く現實感を受け取らせるのだ。だから嫌でも應でも現實にての凝視を据え付けねばならない事となるが幸ひである事はそれが現存社會組織と、その不合理な諸多の毒素と感得させる機緣に明かになる點である。

　彼等は家庭に於いて如何にすれば隸屬的束縛から脫しうるか、當受の家庭はどんなものであらねばならぬかを先づ第一番に知つてゐる。出でては勞働乃至雇傭の體驗を持ち、それだけに社會組織を感受或は理解する。

　今や社會のあらゆる局面に於いて人々は階級戰の進前を見つゝある。不合理にたいする正義の抗爭が抗爭されつゝある。敵か味方かの明快なる選り分けが思想的傾向によつてか行はれつゝある。

第四階級の目的が搾取階級からの隸屬的解放にある事は云ふまでもない。女性と雖男性にたいする完全な解放の前

に階級的解放戰の分野に就かねばならない。女性の男性からの完全なる解放は階級戰を通してのみ行はれうべきである。何故ならば女性がどんなに男性からの解放を望んだ所で不合理なる現在資本主義組織がその姿態をそのまゝに持ち續けてゐる限り實現されないからである。

資本主義組織が女性を、あらゆる點で完全に奴隷化したのである事は、女性が何よりも先きに痛感しなければならぬことである。旣成の女性道德は資本主義的色絲で綴られたものなる事を知る限り、女性の新倫理は資本主義者の倒壞を差し措いては何うにも出來ない事になる。結婚なるものは純愛を基調として成立しなければならないに拘らず、それが何如に多く財產なる無生物のために不自然にされてあつたかは女性の誰にも分明てあるべき筈だ。パンのなやみのために、戀愛を忘れねばならぬ不合理を社會に發生させたのはそも〳〵資本主義組織ではなかつたか。若し人々に生存權が確保されてあり、女性が寄生的生活をしなくてもいゝとなれば結婚は戀愛のみを基調とし、人格と人格との融合的結合から成立せる譯合てはなからうか。

貞操の觀念にせよ、それは男性偏重てはなくなるてあらう。貞操の偏重的觀念は女性の寄生的運命が生んだ男子專制の考方だが、それも根本は財產的觀念と聯結はないてあらうか。

賣淫の問題の如きは、資本主義組織が生んだ最も畸形兒的存在に外ならないのである。賣春の原因が變態性慾にある場合は稀有てあるにちがいない。それは云ふまてもなく生活の窮苦と至大の關係に立つことは統計をこゝて繙くまでもない事と思ふ。

女性は女性の地位を遺憾なく蹂躪し去つた資本主義組織を呪咀してゐる。從つて女性が女性の地位を完全に還元するためには何を考えねばならないかはこれ亦茲に說明するまでもなにてあらう。

それは色模樣の夢を夢みては成し遂げらるべきではない。現實にたいする鋭光なる凝視からのみ初めらるべきのみだ而して社會組織の理解と、それに即する社會觀的思索と不合理打破の實行とが、その次ぎに必然的に來らねばならぬ。

推論にして以上の如くあるならば近代女性は現實主義の勇敢なる掲揚者であるべきだと思ふ。その意味から見て現實感をその生活意識とする職業婦人の使命は黎明に徃く近代女性中でも最も重大なるものであらう。(完)

職業婦人の使命

山田きく

一

恐ろしい大震災の時から早くも半年の月日がたちました。僅に數分間の大地の震動に脆くも灰塵となつた東京は、再びありし日の繁榮を回復すべく、營々として努力して居ります。日本が一部の國民の何よりの喜びとしてゐた地位、即ち『一等國』乃至『五大列强』の列から落伍して、經濟的に二等乃至三等國の列に落ちたといふことは、單に此等の人々の自負心を甚しく傷つけるだけのことに留まらず、今後の日本の婦人や勞働者の上にも、かなりに深刻な影響を及ぼすであらうと考へられます。

申すまでもなく、現在の日本は資本主義の經濟組織を採つて居る國柄であります。この組織は、一方に莫大の金や、土地や工場や、機械などをもつてゐる資本家があり、他方に働くより外に食ふ道のない、非常に多くの勞働者の群のあることによつて維持せられ、繁榮して居るものであります。この制度の下に於ては、

何でもいゝから職業が欲しい、どんな割に合はぬ仕事でも、飢死するよりはましだからといふ貧乏な勞働者の大軍が何より必要であり、重要であります。ところで婦人は何千年の昔から家事と子守とだけを仕事としてあてがはれ、經濟的には、全く男性に附屬し隷從して來たのでありますが、資本主義の發達に伴なふ色々の社會的變化の結果として、家事と子守にだけ沒頭しては居られなくなりました。即ち商工業の發達は、一方では富を資本家の手に集中して、他方貧乏人の數を無制限に殖し、よつて婦人にも亦自活の道を求めることを餘儀なくさせ、同時に機械工業の發達の結果として、家庭の勞務を輕減し、また商工業の繁榮に伴なうて婦人にも無數の仕事口を提供するようになりました。生活難が結婚難を伴なふことも、更に同じ原因が主婦や母親にも職業生活を强ふることになるのも、云ふまでもないことです。

そこで婦人が職業市場を目がけて殺倒するのはどうする事も出來ない大勢であります。ところで、この現象は二重の結果を生むことになります。第一には、婦人がともかくも職業によつて獨立する結果、經濟的にも精神的にも、親や夫の支配をはなれて、獨立の市民、一人前の個人となる傾向を生ずることであります。これには、殊に初期に於ては、色々の弊害も伴へば、様々の過ちも起ることでありませうが、大體に於て、ともかくも、婦人が家庭の拘束をはなれ、男性の支配を脱する第一階段として有利な變化に違ひないのであります。

第二には、婦人が職業市場に殺倒することから起る不利なる影響であります。家庭では幾ら働いても一文

にもならぬ婦人は、職業につく時、同じ仕事に對して男性より遙かに廉い賃銀に甘んじますので、自然、男性にとつて誠に厄介な競爭者となります。即ち婦人の就職希望者のために、給料の高い男子は首になることもあれば、又同じ仕事に對して在來より廉い給料に甘んぜねばならなくなることもあります。ところが、その同じ仕事を奪ひ合ひ、賃銀をせり下げ合ふ男子と女子とは、元々同じような境遇にあるもので、或は兄弟姉妹、親子夫婦でないとも限らず、廣い意味で一家族と同樣の、同じ階級に屬する者同士なのですから、その競爭、その職業爭奪戰は、骨肉相食むの結果となり、お互に、相手と同時に自分をも傷つけることゝなるにすぎないのです。そして賃銀が廉くなり、失業者がふえるに隨つて、働く者の側では精神的にも肉體的にも貧しい生活を强ひられ、これに反して資本家は、働く者の側の競爭につけ込んで、益々彼等を廉く使ひ、益々うまい儲けが出來るのです。

　かように婦人の職業生活は、一方では男子との競爭によつて無產階級全體の生活に不利な影響を與へると同時に、その過激な長時間の勞働によつて、婦人自身の健康をそこね、ひいて子孫全體に禍を及ぼすといふ恐れがあります。これは世界中の資本主義國を通じて顯著な事實でありますが、殊に日本などのように、勞働保護の施設の殆ど全然缺けてゐる國では、工場地や鑛業地方の死產や嬰兒死亡率は恐ろしい數に達し、敎員、事務員等、謂ゆる自由職に從事する婦人の間でも、同じ傾向が著しいのであります。

二

かように婦人の職業生活には、「婦人に經濟的獨立の機會を與へる」といふ有利な一面と、「男子の競爭者」としてその職業を奪ひ、又は賃銀を引下げ、更に「婦人自身及び子孫の健康」を破壞するといふ不利な一面との二つがあるのであります。世間には此第一の、有利な方面ばかりを見て、婦人の職業生活は、たゞそれだけで婦人の解放だと早合點する者もあれば、又第二の不利な方向ばかりを問題にして、婦人の職業生活を罪惡視し、これを資本主義以前の經濟狀態に相應した舊い婦人の境遇―即ち家事と子守の世界へ追ひ戻すほかはないと絕叫する人々もあります。

けれども何人がいかに絕叫したところで、婦人にも自活の能力と機會との必要になつた社會狀態を如何ともすることは出來ません。さうかといつて婦人の職業狀態を今日のまゝに放置しておいては、男も女も親も子も、無產階級全體が益々悲慘な奴隷狀態に陷り、益々墮落頹廢してゆくの外はないのであります。そこで婦人が經濟的獨立を保ちつゝ、なほ且つ人として母として健全に暮す方法はどうかといふ問題になります。これには根本から今日の社會は不適當でありますが、私共はたゞ手を拱いて、口でばかり喧ましくその非を鳴らしたところで仕方がありません。私共はまづ手近かに橫はつてゐる問題から取上げて、步一步、解放への確實な道を辿らねばなりません。男女共通の賃銀率、勞働時間に對する制限、產前產後保護等は、私達職業婦人が、先づ第一に要求せねばならぬ當然の權利であります。筋肉勞働者は既に勞働組合を組織して自分達の利益を保護しようとして居ります。自由業に屬する者も、同じく資本家の道具として使はれ、同じく

健康や生命や人間としての權利を蹂躪される危險にさらされてゐる以上、相共に團結して勞働條件の改善を圖り、人として女としての解放を期すべきではありますまいか。

三

大震災は日本の資本主義に深刻な打撃を與へました。資本家階級はそのうけた手傷をいやすために、あらゆる方法を講ずることでありませう。そしてその最も安價で有利な方法として、廉い上にも廉い勞働者を傭はうと努めるようになることは必然の勢であります。震災によつて在來の職を失うた人々が數へ切れぬ上に產を失ふて新たに職を得ねばならぬ必要に迫られた人も無數であります。そこで職業に對する競爭は益々甚しくなり、隨つて組織のない、團體の力によつて保護されぬ男女勞働者の境遇は愈々不利になるばかりです。

資本主義の發達は、否でも應でも婦人を家庭から驅り出して職業生活に追ひやるものでありますが、最近まで此必然の傾向を否定して、專ら結婚と家庭とのみに適した婦人を仕立てようとしてゐた日本の女子敎育界も、周圍の形勢に餘儀なくされて、昨今は漸く職業敎育の必要を認め始めました。今後は婦人自身の經濟的獨立の要求と、社會の經濟的發達との二つが相合して、益々婦人の職業生活が一般的となるでありませう。が前にも申したように、かくして婦人が職業市場に殺倒する結果が、徒らに自巳及び無產階級全體の奴隷狀態を甚しくすることになつては、折角の骨折が却つて仇となるばかりであります。そこで今後の婦人は、單に職業によつて自活する能力と決心とをもつだけでなく、職業上の地位を改善して、人として女としての獨

立と幸福とを、二つながら全うすることが出來るように努めねばなりません。それには團結の力よりほかに賴るべきものはありません。私達は、抽象的な、空疎な婦人解放の叫びを擧げて精力を浪費する代りに、默つて、然も力强く、お互に手を取り合つて、職業婦人としての當然の權利を主張し、擁護しようではありませんか。

握手しましよう

私たちは、各地に散在して、身うちに溢れる熱持ちながら人知れず埋もれたまゝに孤立してゐらをれる同志が、非常に多いに違いない事を信じてゐる。私たちはさういふ姉妹たちと、固い々々握手をしたい。

　今こそ私たち婦人の起つべき時だ、今こそ、私たちはたつた一つの、否半分の力でもおろそかに放棄すべきではない事を思ふ。

全國に散らばる同志きやうだいよ！

あなた方が東京にいらしつた時には、きつと會ひませう。會つていろ〳〵話し合ひませう。

　私たちも各地方に出かけて行つて、方々の姉妹と親しみたい。私たちが各地のみなさんにお眼にかかる機會を作るために——それは、地方に在る姉妹たちの力添がなくては出來ない——あなた方と私たちとで協力して、婦人の懇話會や講演會等をあちこちで催さうぢやありませんか。これからはだん〳〵暖かにもなるし、特にかういう會合をするに相應しい時節です。私たちの希望を容れて、みなさん、どうぞこの計畫を進めて御盡力下さい。具體的なくわしい事は書面で御相談をいたします。

最近の感想より

三谷セリ

□

怒り得ぬ寂しさと、笑ひ得ぬ寂しさと、どちらが不幸てせうか。快よき哄笑の出來ない人に、ともすれば陰險な人があるやうに、怒るべき時に笑ふやうな人にも氣の許せないことがあると思ひます。私はほんのちよつとした事に怒りたいことがあると同時に、どんなことも笑つてすませることが多くあります。怒つてゐる時は、自分自身に對していひ様もない不快を感ずると共に、笑つてすませた時もまた自分に唾でも吐いてやりたい嫌惡を感じます。けれど年と共に、色々の事を知ると共に怒れなくなるのが常てはないでせうか。年とつて怒りつぽくなるといふのは、心の正しい發育をした人てはないのでせう。本當の老人――それは成熟の意味を含めた――は、やはり寛濶な包容力のある人になることでせう。私はすべてを宥すの寛宏の心をもちたいと願ふけれど今までも怒り得ない方が勝つてゐたと思へば、心もちよく怒れるさがをどんなに望んでゐるでせう。

□

詫びようと思ひ、また詫びなければならないと思つたことて、ふと機會を失したためにそれきりになつてしまふことがよくあります。機會を見つける聰

明と敏感とは、私共の生活を圓滑にするにかなり重要なものだと思はれます。

□

私はもし人の價値を質の上で差等をつけるならば知る知らないや、理解するしないや、また行爲に表す表はさないといふやうな事によつてはしたくないと思ひます。それよりも大事なことは感ずる感じないといふことだと思ひます。感ずることには、かなりの度で質の差があるやうに思はれてなりません。けれども、その感じを表はすことの上手下手には勿論差等があります。この差等こそは、度の差量の差であつて、質の差とは思ひたくありません。私は才氣走つた物知りより、默つてゐる敏感者の方をどんなに好むでせう

□

自分の價値標準からではなしに、たゞ一般的評價から本を買ひ集めるやうになつて行く傾向を自分に見出したことを寂しく思ひます。

□

誰にも明し得ない經驗なり秘密なりを持つた人ほど寂しいものはないでせう。がまた一面からはさういふ人ほど強い人間はないとも考へられる時があります。

□

時折り、妻を娶つて幸福に暮してゐるといふ古い戀人が、その妻に死に別れて自分の懷に再び返つて來る日があるやうに空想して見ない人があるであらうか。それはシベリヤへ流されてゐる無期懲役人が、何かの幸運で刑の輕減命令に出會し、故郷へかへる日の來ることを空想するやうに。

□

人の名ても物の名ても、どうしてさう呼ばなければならないかなどゝ考へて行くとおかしくなることがあるものてす。世間の何々主義者といふ人達も、ちやうど植物の一新種が發見された時、植物學者によつて分類され命名されてしまへば、その名以外に呼ぶことができなくなると同じてはないてせうか。人にも草にも名は必要なのでせう。けれど、名がなくても存在性のあることも時には私共は考へたい氣がします。

□

ダーウキンは或る時、溝の底に澱んでゐる泥を乾かして、百種以上の植物の發生を見た實驗をしたといふやうなことをかつて聞きました。溝の底の泥中にそれだけの種子が埋れて生きてゐたといふことは意味深い事に感じます。人間の伸びるべき傾向も無限に多いのてはないかと思ひます。たゞそれの、發現の機會と從つて成長の機會とが與へられなかつたために、伸びるべきものも伸びずに終るのだと思ひます。人の賢愚は遺傳の要素が、大きい部分を占めてゐることは疑ひないが、また一面からは、いかなる萠芽をもつて生れるものだと思ひます。私は未來の理想社會といふことを描いて見るたびに、このダーーウヰンの實驗を思ひ浮べるのてす。つまりその社會ては、その人の持つてゐる天分が少しも埋れずに、充分に伸びて、花を開き、匂を發散して、しかも調和してゐる狀態を考へるのです。徹底個人主義といふ言葉があるが、それはやはり、個人々々が内部に備へてゐる力のありたけを發現したことてはないてせうか。兩性の間も、今のところ人格價値

の上で、同等といはれますけれど、本當の両性の職能はまだ未知の世界にあると思ひます。私は私達に身の本具の性質を本當に明かに見出し、それを確かに握つて、伸びるだけ伸ばすといふことが、すべて婦人運動の核心だと思ひたいのです。

沼

美しい沼でした
飴色の冬の陽が大きくねそべつて、
森のかげが不思議な色調をなげてゐました
何といふすばらしい魅力でせう
——死んでしまひたい——
わたしはさう　つぶやきました。

青い深淵が凄い美しさを増してきます
藻が絡みあつて　おどつてゐます
何といふすばらしい　魅力でせう
——死んでしまはう——
わたしはさう叫びました。

しばらくたつて　わたしは
沼を逃れ樹の根に座つて
涙を出してゐるわたしを見出しました
——どうして死ねないのだらう——
わたしは　こつそり　つぶやきました。

——彫子——

職業婦人の立場から



奪はれた半分の幸福

小澤豊子

朝、目のさめた瞬間に、昨夜散り〳〵に頭から去つていつた喜びや希望を呼び集める。一番先に歸つてくるものは何時でも「仕事」であつた。今日亦役所へいつてあの仕事をすると云ふことである。

私に取つて職業はそんなにも樂しいものなのである。併し私の魂は燒ける樣な不滿を壓し包んでゐる。

何を爲す爲に私は職業に就いたのか、職業に就かなければならなくなつた原因が私にはあつた。それは貧乏と云ふことである。併し生活の資を得る爲に職業に就くと云ふことは、大方の男子の上に降りかゝつて居る運命である。それと自分の場合とは同じ樣であるけれども、違つて居ると云ふことを、私はこゝで語りたい。

男子が皆働かなければ生きて行けないのにも拘はらず女には働かないでも生きて行る道があつた。それは結婚である。現在の世の中に於て考へ得る結婚と云ふものは男が女を所有する事だと云つてもよい程なものである。所有されて居るものに自由は認められなかつた。完全なる人格は完全なる自由の上にのみ立てられると、信じて居る自分には現在目に見る所の結婚生活と云ふものは到底希望することの出來ないものである。

貧乏と愛も撰擇もない結婚問題とに追ひつめられた私は、唯一の血路として職業に向つて走り出した。私は其處で色々な賴しいものを發見した。其れは先づ一人の命を、わづかに支へるに過ぎないものだけれども、自分の金と云ふものを握ることが出來たことである。現在の社會制度の中に居れば、金は可なり有難いものである。自分にとつて一番手近い苦手であつた親や兄弟の壓迫から逃させてくれたものは金であつたから。

私は尙喜ばしいものを見出した。それは細かい煩はし

い事務についてゞあつた。朝から晩まで少さな金額を計算したり、めんごうな書類を書いたりして居る。それだのに何こも云へない喜びが何時も、こもなつてゐる、私はその喜びがどこから來るかについて考へた。きまりきつたこの樣ではあるけれども、次々に來る仕事を一々整理して居るこ其處には、自分でなければ到底解らなかつたであらうこ思はれる、小さな面白味を見出すここが出來る。そして或る限られた範圍の中にそれ相應な責任を持ち合つて居る。其責任は程よい緊張を與へてくれた。自分の一きそのものが直接社會へ影響すると云ふここを喜ぶ心持を人間は皆持つて居るこ私は思ふ。又獨りで淋しく爲して居るのならば到底たへられないであらこ思はれる煩雜な、量の多い仕事に疲れて居る時にでも、自分の周圍に同じ樣に疲れながら一生懸命に働いて居る人々を見出すここに嬉しいことであつた。

女の手に委ねられるこきまつて居る樣な、家庭の衣食住にともなふ雜務を私はわづかしか持つて居ない。もしも自分が職業を持つて居なかつたなれば家庭內の雜務に朝から晩まで追まはされたことであらう。其時私は職業に對して持つて居る樣な面白味を其處に見出すこごが出來たのであらうか。家庭內の雜務がすべて自分に適して居ると思つて爲すのならばよい。そうでないのにいやいやながらでも、其れを爲さねばならないこされて居るものならば、女は何こ云ふ不幸なものであらうか。

男子が一生の目的として撰んだものを職業こして專門的にそれに從事して行くことが可能である樣に、女にも目的を中心にした生活が可能であつてよいこ思ふ。

併し其處にきて難問題にぶつかつた。職業がよい結婚をする迄の經濟上の不安からのがれる手段としてのみ必要なものなれば何も考へることはいらない。けれごも生涯を通じて爲さうこする目的を持ち、それによつて社會的に働きそれによつて生活の資を得て行くこしたならば私は其處にごんなに强い生き甲斐を感ずるであらうか。

けれごもさうしたここが、多くの場合在來の家庭を潰さなければならないものなのである。母親は今までの樣に終日小供こ供に暮し得なくなる。それでよいのかと云ふ問題である。

母の役目を負をうこしない自分、母てふ境遇からあまりに遠くはなれて居る自分、輝やかしいはづの喜ばしいはづの母の務めそれを拒否しなければならない自分を悲

しく思ふ。

母として生き樣とする時に、研究も事業も喜びと愛とを注いで居た職業も拋擲せねばならない。それ等のものを拋擲すると云ふことが、我々女達の上にどんな結果を齎すかと云へばそれはあまりに明白な事實なのである。

私は多くの年取つた母親を見る。彼女等はほんとうに苦難を負うた人として敬慕と讃仰とを受けて居るかとも思はれる。しかしそれは抽象化された過去に對する仄かな讃美に過ぎない。母親は現實奴隷の境涯に居る。

彼女等はほんとうに社會人類に對する奉仕の念から、或は各々其持つて居る考への下に、子供を生み、育てゝ來たのであつたらうか。それよりも彼女等は唯男子——自分の生活を保證してくれる——に對する服從と小供を大きくすることのみ强ひられて、自分自身の人間としての位置も確立して居ないのさへ氣付く事が出來なかつたのだ。併し彼女等は子供を持つて居る喜びで自分を失望させないで居ることが出來たのである。其彼女等をどうして幸福であると云ふことが出來るであらうか。彼女等は持つて居た天分も個性も奪つて、それで彼女等を幸福な人又尊むべき人だと云ふことは出來ない。

一方母になる幸福を拋擲して個人の經濟的精神的自由を得る爲に、社會に乘り出した女達は漸く從屬の生活からのがれたと思つて居れば、はんとうに女達が求めて居たものと少し違つたものを得てしまひはしなかつたか。

何れの道を歩かうと、女達は半分の幸福より得られない。女自身が求めて居たものは勿論その双方が一つに合さつた生活である。さうした生活を要望する根據にそれが人間社會を一層よくするものであるといふ確信がなければならない。私はそれを信じて居る。

婦人問題が何故に起らなければならなかつたかと云へば、女と男との間に上下の差別及極端な分業が存在して居して居たからではないかと思はれる。そして其結果が一方にあまりな、不利を持たらしたと共に、一方を恣まゝなものにしてしまつたからである。

男も女も同じ水平線上に立とうとする時に、又もつと近よつた仕事をして共勞共榮の喜びを分とうとする時に私は多くの喜ばしい情態を豫想することが出來る。

卑しい優越感に醉ふて居なければならない個人本位な資本主義の世の中に於て男子が女子よりも優越して居ると云ふ誤謬を直すことはむづかしい。併しその人達でも

女子が教養に於て技能に於て今の情態よりももつと〳〵高められた時にどれだけ自分達も幸福であらうかと云ふことを考へないであらうか、私は考へる。女と男とは教養を積むことによつて決して相離れては行かない、又同様の職業に從事することによつて爭奪戰も起るはづのものではない。お互がよい影響を受け合つて圓滿な社會が出來て行くはづだと思ふ。けれども今の所それは不可能らしく見える。それの原因は大てい資本主義社會なればこそと思はれるところにある。經濟的自由競走の世の中は利己と云ふことが基礎になつて發達して行くより外道がなかつたのだから。

誰もがお互に貢献する爲に、平等に勞働を分擔すると云ふ考へを持ち得たら幸福だと思ふ。現在の世の中に遊んで贅澤に食べて居るものと、働いても貧しく食べなければならないものとある事を、誰が不愉快に思はないものがあるであらうか。私は自分の職業として自分に適するもの好むものを撰びたい。併し勞働の中に誰もが喜ばないものがあるならばそれを一部の人にのみおしつけてはならない。お互の爲に苦しみを忍んでもそれを負ふ心持を起さなければならないと思ふ。勞働が藝術であるかどうか私には解らない。が少くとも陶醉、享樂、玩弄、そんな言葉でゞも表したらよいかとも思はれる貴族達によつて保たれて居る所謂藝術ではあり得ない。勞働を藝術の境地に迄引き上げると云ふことを私は考へないではない、が現實の世の中を基として次のもつとよい世の中を想像して見ても、お互に隣人の爲には自分に苦痛なことであつてもそれを爲す義務を負ふべきだと考へた方が自然である様に思ふ。

女達は自分に適當でないと思つたならば、何時でも家庭の勞働をすてゝ社會に出てくる方がよい。其處で自分にとつて價値があると思つた職業を採るがよいであらう併しそれを自分自身の享樂の爲にのみ、してはならない、他人と自己とを平等に生す爲でなくてはならない。初めから他人の重荷を分けて負ふつもりでなければならない。苦しいかも知れないけれど、お互に助け合つて居るのだと、云ふそのことは、何物にもました喜びをお互の心に充たさせることであらう。誰をも犧牲にしてはならない。併し誰もが平等に犧牲を分け負はなければならない、私はさう思ふ。

婦人問題に少しでも解決を與へたいと思つて此處まで

考へて來たもの丶現實の世の中はあまりにも自分の考へを行ふべき都合が惡く出來て居る。自由と個性とを捨て丶女としての愛の生活――妻と母の生活――と戀愛も母性愛も犧牲にして賃金を得るべく埃の中で働くかどちらかでなければ正直な貧しい女達は生きられない世の中なのである。このまゝで何時までも置くことを女達は好まないであらう。

地方の病院から

山本柱子

「下谷が火事だと云ふのに、淺草へポンプを向けても火は消えないでせう。火を消すには水が何より大切だが見當が違つてゐてはきゝめがない。病人が藥を服むのは火に水をかけるのと同じです醫者は謂はゞ火のある場所を敎へてやる樣なものだ。いくら私が火は此處ですと云つても、あなたが水をかける氣にならないでは消えません」。或院長は常に經過の慢性な患者が藥に倦きて來ると、こういふ說法をしてきかせます。死にもせず治りもせずぐず〳〵としてゐる病氣の大半は結核性のものです。多くの人々は藥に倦きたと云ふよりは、むしろ働かないで高い藥代を拂ふことに耐えなれなくなつて醫者通ひをやめるものです。こういふ患者に餘りきき目のない藥をやつて長く通はせる樣になれば、醫者も一人前になつたのだそうです。私は學校を出ると直ぐ、東京市內のある開業醫の下に助手として雇はれました。院長は醫者の玄關番から身を起して、今日の如く堂々たる門戶を構へる樣になつたのでなか〳〵如才のない人でした。彼は常に開業術を私に敎へてくれました。けれども私はそうした世渡術よりも、直接醫學の方面で指導して貰ひたいことがたくさんあつたので暫くしてから親切な院長の紹介である他方の小都會の內科專門の博士の下に行きました。町の人口は八萬余りでした。最近に發達した工業の盛な街で活氣はありましたが、がさ〳〵とした落つかない感じのする人でした。市中に博士は二人しかないと云ふのでその市を中心にした二三十里四方の人々は新聞の廣告をたよりにはる〴〵と博士の學位に憧がれて診察を乞ひに來ました。ですから博士のところに集る患者は他の開業醫に比べて變つた病氣が多いのでしたが、それでも患者の半數以上を占めてゐたのは結核でした。日本一の藥器

會社、煙草の專賣局、鐵工場、大小數多の織物工場等を市外に所有してゐるので市民の多くはそれらの工場で働く人々の様でした。私はこの街へ來てみて、博士の商賣振りが如何にも近代的な工業都市に似つかはしいのに感心しました。溫容を以て接するとか、親切にしてやるとかその外多少なりとも人情味のある方法で患者を得てゆく様なことは博士には必要ない様に見えました。博士になるまでにかけた資本の取り返しを博士になつてからするのですから、他の一般の町醫者よりも一層露骨に患者から搾取し、一から十まで現金勘定でゆくのです。まづい物を食べて夜の目も寢ずに働いて得た幾日分かの賃銀を投げ出して、不治の病の宣告をうけに來る職工が何人あるでせう。初めの中私が不思議に思つたことは農家の人々に結核が案外に多いことでした。けれどもそれも少し事情を聞いてみるとわかることで、年頃になつた娘達が一ケ年百五十圓位の前借で織屋の女工になつていやな病氣をしよいこんで來るのです。一度病氣になつたらのは必ず家族の誰かに病を傳染して死んでゆきます。既に醫者を訪ねる時から病氣は可成り進んでゐるのが多く、醫者へかゝつたとて醫者の命ずる様に養生法の出來るものは極めて稀なのです。患者が藥を服まないのは彼の我儘からではなく、患者が安靜を守らずに働らくのは餘儀ない生活の壓迫からだと云ふことがわかつて來ると彼の病氣を治してやるには彼を貧乏からまず救はなければならなくなります。時々私は代診として往診に出かけますが、大手を振つては歩けない様な路次の兩側を車夫が先に立つて一軒々々探して歩く時などつく〴〵こんな日向りの悪い不潔な家に住んでゐては病氣になるのは當り前だと思ふことがよくあります。如何に衞生學が人間の衣食住に就て理想的なことを敎へたにしてもそれが何になりませう。醫學は病氣を治すことばかりを目的とするのではなく、疾病を豫防することをも研究する學問だとしたら世間の多くの人々にこんなみじめな生活をさせておくのを私どもが默つてみてゐるのは正しいことでせうか不合理なことは見ない振りをしておいて病氣になつた人達から藥代や診察料だけ取るのが商賣だとしたら實際醫者はいやな職業です。夜店の露店商人でも二三割しか儲けがないといふのに藥ほど儲るものはないんですから。助手として雇はれてゐる現在の私としては男の醫專の人々と同じ年限の修業をして來てもその三分の二或は二分

の一の給料しか與へなと云ふ世間一般の習慣に對して不平はあるが特別女醫と云ふ職業がいやなものとは思はれません。けれども自分だけ生活は安定だからと云つて、事なかれ主義に僞善的な態度で患者に接してゆくことが心苦しくてたまりません。

若き敎育者の惱み

中村喜代子

三月の卒業と共に肩上は下されて、四月に入ると何時の間にか敎壇に立つ人となつて居た。あはたゞしい月日の前に無邪氣な新入生は何時か休暇を迎へる日も近づいた。あしかけ四ケ月に渡る自分の敎員生活を今かうした機會に際して泌々見詰めて見るが、社會から畫された學窓に敎壇に對して憧憬れたのも、餘りに若々しい世間知らずだつたのだ。三月迄生徒だつた身が無經驗にも敎壇に昇つた時、六十幾名かの愛くるしい新入生の視線が一時に押寄せた。とその刹那恐ろしくつき詰めた氣持が胸いつぱいに擴がつて一人一人を抱きしめたい様な衝動を感じた小さなおさげ髪の新入生が昨日と變る女學生に得意になつて騷いで居るのを見ると、彼女等には坦々たる大路が展開されて居るのかと思はれる。あゝあの若々しさ何ものも突き拔けて行かねば止まない生に對する力をどんなに賴もしく思つたであらう。自由に個性を伸ばしたならきつと彼女等は思ひ〳〵の境地を開きそこに自己を活かすと共に、人をも生かして行くであらう。萎まずにほんとうに其の儘の自己を伸ばしてもらひたい！

かうした憧憬と信賴とを新入生の上に振り注ぎながら日は幾日か過ぎて行つた。

とある日、いつもの通り敎室に這入つて行くと、一人の子がシク〳〵泣いて居る。「どうしたの」と尋ねると泣きぢやくり乍ら、手を擧げる時に聲を出したので叱られたのだ、と答へた。と同時に六十幾名の生徒が一度にガヤ〳〵不平を言ひ出した。日頃から若い自分を姉の様に思つて居る生徒は、此時とはかり「先生手を擧げる時に聲を出さないと氣拔がするんです」と甘へる様に叫んだ。彼

女等の内にある本能の壓迫された不平を若い自分に對して投げつけたのだ。それを聞いた刹那、頭がガンとした。聲を出すのがなぜ惡いのか、八釜敷いと悟れば自ら止めるものを、否聲を出そうとして、必然的に年の重なると共に聲を出し得なくなるのだ。だのに頭から聲を出した者は點數を減らすとか、何とか云つて幼い者を嚇しつけて生徒は内から起る力のやり場なさに眼をパチ〳〵して不平顏して居る、不意の失聲によつて頸を縮めるあのいた〳〵しさ！發聲して得々として居る時代に聲を出さしてやりたい。なぜ無理に押へつけるのだ、だが吾が性の弱さは「八釜敷いから御注意なすつたんでせう」と心にない言葉を口にして仕舞つた。今までどうかして自分達の發聲を許されよう。少くも味方になつて、と豫期して居たのが冷たい自分の一言で生徒は縋りつき樣のない暗い顏をして仕舞つた。教育といふ事を一ツの型に容れる事と思ひ込んで居る教育家達には各自の個性子供の本能とかいふものに對しては一寸も眼が開て居ないらしい。生きてどン〳〵して居る者を血の通つて居ない人形の如く見て居るのだ。かうして小供の心は一日〳〵といがめられ固められて行く。人間を造るてふ教育が反對に人間の美を失つて行く。何といふ矛盾だらう。

眞實に一人の者を伸ばそうとするには吾々は餘りに弱い自分を知る、一時の感情に支配されて其の子の永久の不幸を造つて行く事に氣付かないのだ。生優しい教育家が、甘やかして子女を育てる時、きつと無自覺な我儘な人形の樣な子供が產み出される。眞綿に首をしめる樣に、優しい優しい教育家(男)の手が永劫に覺めない女性を造り出そうとして居るのだ。而かも女教育家の間にも、自己の女性たるに氣づかずに、自己の圍まれた絆の中に多くの女性を取り容れ樣として居る。何千年來無自覺の標本の樣に收まつて居る女性に對して眞の叫びを擧げてくれるものは、女性に對する眞の味である。あらゆる批判を加へられてそこに始めて自己を凝視する力ある者が頭を

掻げ出すのだ、かうして何者にも支配されない一女性が産み出される、そして此の可能性の多分に持つて居るのは現在の女學生である、而かもその可能性は徐々に削られて行く、何といふ矛盾だらう。

　嫁入道具の一つとして居る女學校の教育は徹頭徹尾、妻として主婦としての教育で、人間の教育でない。人間たれといふ前に、妻たれと教へて居る樣だ。乳くさい、母の懐から飛び出して來たばかりの新入生を捉へて『女子は妻となりては夫の命に』と得々と説く道學先生の氣が知れない、定木や物指で人の心を知らうと焦つて居る間に、時代はいつか木石先生の頭を通過して居るのだ。教へ子に一つの戀愛事件が起つたとては、目を丸くして狼狽へる愚しさ！なぜならない前に人間を造つておかないのか。なつて仕舞つた者をいくら頭からガミ〳〵言ふても追つかない。時は過ぎて居る。樂な道があれば、樂な方へ走らうとするのが人間の通有性だ、其の先に自分を縛りつける絆の待ち構へて居る事を知らずに若い者は樂な道へなだれ込む、生優しい教育家の手に女學生は一歩〳〵樂な、恐ろしい道へ落ち込んで行く、何といふもどかしさだ!!

『女の頭の中に家庭より他に何ものもない』といふ言葉を折々耳にする。偏頗な誤られた教育が何時かしら女の頭に家庭の二字を植つけて、その擴がりなる社會を、忘却さして仕舞つたのだ。女の狭い心持—寄ると觸ると人の噂と着物の話—それも要するに家庭を出ない教育の缺陷であるまいか。袴を離れると造人形の樣に着飾つて嫁ぐ奥樣の生活は、人間の生活か人形の生活か疑はしい。粉屋から頸を出したやうに朝から晩まで化粧三昧の生活の中に、果して人間の生活があるのか、あの着飾つて、眞白に塗立てた後に、暗い、淋しい空虚が巣喰つて居ないのか刻々と若さは薄れて行く、何時まで美しい容貌も續きはしない。いつかは一燼の灰となつて地中に埋められるのだ、その時、我が生の足跡を悔まずに冥目し得るだらうか。

　わがものとては一つもない女の生活、それに疑惑を起さないだらうか。小供が女の全部だと言ひ切つて仕舞へばそれまでだが、然かし何時まで小供は親のものでない。小供を生み落すことは畜生にだつて

出來ることだ。その生み落した小供の個性を傷けない樣に、補導して行くのが親ぢやないか、人間ぢやないか。

決して親のものぢやないのだ。聽てその小供も大人になれば、親の道を今一段の進化?を以て繰返して行くものゝ樣に思ふ。かくして文化は進み行くのであるまいか。その母の敎育所が社會を輕視した家庭本意の女學校である。そこから吐き出される女の心に、社會といふ大きな家庭が擴つて居るだらうか彼女等の胸には小さな家庭のスウヰートな場面のみしか描て居ない樣な氣がする。女性自覺の先驅者が東西奔走して同志を集める時、家庭の小ぼけな世界に女王然と濟して居る女は、冷かな侮蔑の一視を之等先驅者に投げつけて、誰の爲の奔走かさへ耳を借さぬ。あはれな圍ひ者!!自分の生命がどこに伸びて居るのかさへ知らないのだ。女學校出の若い人々よ!つき詰めて自己を凝視して下さい。

明暮のドッシリ詰つた電車の群、その乘客の大半はうら若い女性の一群れてある。一日の疲勞に眼は物憂く鈍つて、物を言ふ元氣も、讀む努力も起らない職業婦人の悲慘な裏面!!うはついた世の風潮につれて外見を飾らねばならない人々の胸の中よ、疲れ切つた肉體をかのすし詰の箱に投げ入れる時、彼女等の心には、何等かの疑惑が疲勞と苦痛の底に溢いて居ないだらうか。先天的に弱い肉體を、荒くれた人の中に縮めて、朝夕混雜の中を通り拔けた時ホッとした心の中に、何が爲の生命か解らなくなりはしないだらうか。經濟的の獨立、否可能性が無ければ、人として認めてくれない男性への反抗であり。自己の鞭韃であるとは言ひ條、今の社會組織の不徹底さには、經濟的獨立の可能性が誤られた方面に進んで行く、淋しいさ吟ならうか、慘めだと怒鳴らうか、かうして生命を繋て居る多數職業婦人の養て居る現社會を女學生は殆ど知らない。極樂の樣な敎室に、世の中の表面的な部分のみかき集めた敎科書や講義に心をとられて居るかの女等の行末は?

見も、知りも、聞もしなかつた社會の眞相をみせつけられた時の惑ひ、恐怖、悲觀、惱み、それが一時に押し寄せて來る。かうした社會といふことを知らず、己が育まれた天上の敎育をそのまゝ押擴めて

憧憬れて居た社會は、實に汚ない、醜い人と人との爭鬪である。それに對する準備のない者は、汚い醜い社會の底にもみ消されて居る人間の愛に氣付かないて、平面的な世相の中に巻き込まれて、己自身を生命の抜け殻の様な生活に引入れて行く。手觸の柔かな極樂の生活がほんとうに彼女等の生きる道を敎へて居るだらうか。敎育といふことに信頼しきつて居る彼女等の輝やかしい瞳よ！もつと見開て敎育の底をみつめて下さい。信頼することはいゝが、信頼すべからざるものを過信すると飛んだ目に遇う。

×　×　×　×　×

思ひのまゝを述べてみたが、もはや頭が混亂して續き得ない。静かな夜、チット自分の心を凝視する時何ものともつかない暗い影が押寄せて來る。拂うとする程執拗につきまとう。敎壇に憧憬をもつた夢想家は、今幻滅の悲哀に惑つて居るのだ、だがまだヘコタレはしない。憧憬を捨てれば最早やおしまいだ。之からこぎ直して行くのだ、砕かれたからとて尻餅をついては駄目だ、再び三度立ち上つて憧憬を追ひつめやう。永遠に追ひ詰め得ない憧憬であらうとも一歩でも二歩でも近づかんと奮鬪するのだ。書き並べた事は幼稚であらうとも、机上の空論にならざるやう自分を鞭韃しよう。

女の次官さん

今年の一月に、イギリスでは、勞働黨の政府が出來ました。大臣は、ほとんど、勞働黨の方達であることはいふまでもありませんが、總理大臣マクドナルドが氏をはぢめ、昔は、私達とおなじ様に、工場で働いてをられた方も少なくありません。その中の勞働大臣の次の役である勞働次官といふ大切なお役に、ボンドフィールドといふ婦人が任ぜられました。

女で次官になるといふことは、勞農ロシアより他には、全くためしのないことで、大變名譽なことです。ボンドフィールドさんは、これまで二十年間も、婦人勞働組合のために働いて來られました。又、去年のくれの選擧では婦人勞働組合員の方達から選ばれて、代議士ともなられたのです。

心の影

宮本章子

カラツ
カラツ　と
鶴のやうな鳥が、
ないてゐる

私の耳の奥で、
白い影を
ゆすりながら

カラツ
カラツ　と
鶴のやうな鳥が
ないてゐる。

×

ごこかで水の落ちる音がする。
そして、私の部屋の光りが、
それにふるへている。
あ、あ。
その水音は
かすかに、又高く
我が目のうちの
時計のふりこに
ゆれてくる。
ゆれてくる。
そして　私は
深い　もののうちに
まきこまれてゆくのだ。

×

もののけはいに
くずれゆくそら

わがこゝろに
おちかかる

細き金の網を
こしてくるそら
わがこゝろに
おちかかる。

×

高き谷をのほり
低き川にくだり
ゆらめけるものを
影のごとくに抱き
飛びゆくなり

よき句ひをかぎ
あはき色に酔ひ
ながるゝものを
追ひ追ひて
飛びゆくなり。

みよ。
空に
大いなるものの影
ふくれて
わがこゝろを壓迫す。
ものうき心の影より
濃く鋭き光いでて
空にのほりゆくなり。
あ。あ。
みよ。みよ。
そのはろかなる
はろかなる
かぎりなき
陶酔の路を。

御存知でせうが

普通擧選

普通選擧と云ふ事が近頃やかましくなつて、猫も杓子も普選論者で無くては、ならないやうに云つてゐる、しかし其れはほんとうの普通選擧では無い。納税資格の撤廢は、選擧權の擴張には相違ないが、やはり年齢と性的の制限選擧で普選とはまだ〳〵へだたりがある、清浦内閣が次ぎの特別議會に提案して、人氣とりの道具建てに構えやうとする普選なるものは、其の上に「獨立の生計を營む」といふ物的の大きな制限がある。「獨立の生計を營む廿五歳以上の男子」といふことになると、有權者の數は九百五十九萬人となり現在の有權者數に比べて六百四十五萬人多い。更らに獨立の生計といふ制限を撤廢すると千三百四十六萬人となり、一千百三十二萬人も多くなる。即ち今日の納税資格三圓の制限、次ぎに獨立生計の制限とによつて、之れだけの多數の成年男子が選擧權を强奪されてゐるのである。しかしそればかりでは無い。兵役義務年齢から廿四歳までの男子は除かれ、婦人の一人と雖も參政の權利を持たない。婦人は主婦ですら九百五十萬人からある。そして直接の生産者である勞働者の靑年（廿一歳から廿五歳まで）だけでも男子が二百五十萬人の女子が二百四十萬人もある。

かかる一大勢力を無視し、その參政を拒否する選擧法は決して普

通選擧ではない。

ロシアの憲法によると十七歳以上の男女は平等に選擧權を持つことになつてゐる、尤も遊んで食つてゐる有産階級には選擧權を與へないといふ制限はある、之れほどまでに進歩しなくても、今日の間接代表政治の世の中に於ては政治學者の定説は廿一歳以上の男女に對する選擧權の承認を先づ普選といふことにしてある。

英國、佛蘭西、伊太利、ポルトガル、獨逸、米國などは先づ普通選擧だと云へる。

東洋の一等國は今頃晝あんどん式に獨立の生計だ、廿五歳だと恥しくもなく騒ひでゐるが、之れもいたし方ない。少數の有産階級の手に、政治的支配權が掌握されてゐて、政治組織がそれらの人に都合よく出來上つてゐるのだからやむを得ないことて、少數支配の政治、之れを近代語にするとブルジョア獨裁政治の下では、普選の獲得は容易に行はれない。

英國なども「自由の特許」といふ旗印のチャーチスト運動（天保九年から嘉永一年まで今から八十六年前）が起つて愛蘭の雄辯家オコンナーが指揮して普選運動をやつたのであるが、普選の實現したのは大正七年である。このときは八百萬人（内六百萬人は婦人）の有權者が增加したが、それも歐洲大戰にあたつて勞働者と婦人が大功をたてたといふ論行行賞の意味に於てである。

新聞電報によると婦人參政權は年齢三十歳から廿一歳にまで引き下げることになるやうであるが、一部の支配階級の爲めに、あれだけの大殺生をやつて、さて酬ひられたものは普選とそして不景氣と失業の經濟的束縛の鐵則てある。八十六年前のチャーチスト運動が

達成された今日になつてみると、英國の男女勞働階級は、眞の自由の特許は普選によつては得られないことがわかつたらふ。

特權階級

清浦內閣は特權內閣である、清浦內閣の構成分子なる貴族部落は特權階級である、そこで特權內閣倒壞特權階級打破を叫んで騷ぎ廻はるのが、今日の政變であるが、特權階級とは元來經濟上の用語であつて、エンゲルスの說明によると、紡績機械や蒸汽機關が發明されその他機械の發明は、それまで紡ぎ車や、手先きで働いてゐた人たちのお株を奪ひ、奪はれた多數は勞働を賣つて生きてゆく事になり、金持ちは機械を所有し工場の主人となつて勞働者の働きにより益々太ることになる。即ち主人はブルヂョアジー資本家階級で社會的生產手段の所有者であり、プロレタリア勞働者階級は勞働を賣ることより外生きる道の無いもので、この二たつの階級の確然と分立することが近代產業組織の特徵であると云つてゐる、特權階級とは斯かるブルジョア階級のことである。ブルジョア階級のことである。ブルジョア階級は代議政體といふからくりを通じて政治的支配權を獨占してゐるが、これを日本の政局にあてはめると、特權內閣の打破を叫ぶものこそ特權階級のブルジョアジーであつて、打破を叫ばれる清浦內閣と貴族は紛ぎ車の時代、封建時代の特權階級の殘存勢力に過ぎないものである。古い特權と新らしい特權の衝突で、非特權階級のプロレタリアにとつてはどれも特權階級になる譯である。

廢娼運動について

吉村ゆき

婦人運動のなかで、相當昔から命脈を續けてゐるものゝ一として廢娼運動があります。けれどもこの運動も間歇的に爆發するだけで、少くとも第三者の私にとつては、この問題が變化と目先の人氣を好む人々によつて時々にのみ論議されてゐる樣に思はれてなりません。

人間は人間として最も悲しむべき事柄を、センチメンタルな、人道的感情の玩具として幼稚な人々の興味を引くことがあります。それはしばらく、人々の注意の焦點となつて、たくさんの輝かしい『闘士』を生み出します。けれども人々の注意がその問題から去つてしまふ時には、運動自身も立消えになつてしまひます。廢娼運動も一部の人々は眞面目になつて考へてゐるやうに自任してゐますが、そのじつ、自分の人道的興味と、センチメンタルな感情との一時的滿足ではないでせうか。少くとも廢娼運動が、根本的解決方針をとらずに、表面的な、なんの力もないお祭騷ぎのやうな運動をする間は、かういふふうに疑られても仕方がないやうに思はれます。

地震と火事で、あらゆる虚榮と罪惡とが行はれる町の大半は燒けてしまひました。吉原で多くの娼妓が燒け死んだのを樓主の不法拘禁のためだと憤慨し

た矯風會の人々は、吉原が復興しやうとするのに對して、廢娼運動を起しました。厚顏無恥な男子たちは『復興は先づ吉原より』と叫んだり『復興は先づ生殖器より』と廣告をします。矯風會は地震以來奔命に疲れた會員や雇兵を總動員して、すはこそ國家の一大事なりとばかり、四ッ角で通行人の廢娼贊成を强制して署名させました。そして多くの贊成者を得たといつて自己滿足をしてゐます。

もし、私どもが少しでも眞面目に、眞劍にものごとを觀察しますならば、こんなお祭騷ぎや、表面的な觀察で廢娼が達せられるといふことは、どうしても考へることはできません。署名や請願で、賣淫がこの世界から姿を消すものなら、とつくの昔に、その目的は達せられてゐる筈でせう。それが出來ないのは、賣淫制度の原因が、その人だちの考へてゐるもの以外にあることゝ、いはゆる風紀道德の保持者が、裏面で、性的贅澤者であるからだと思ひます。國民道德の保持者であり、謹嚴そのものとして國民的信望を持つておられる將軍樣やお役人が、晝は四角四面な顏つきで、私どもに、勤勉の道德と純潔の必要などを說いて、夜は花柳の巷に陶然とうつゝをぬかしてゐる間は、お上をたよる方法でどうしてこの目的を達することが出來ませう。また國家が公娼制度をみとめることは、世界に對する恥だなどゝいふ對外的な見榮ばかり思ふ樣なことで、どうして公娼が廢止出來るでせう。公娼制度を廢し、單に遊廓を廢したのみで、どうして賣淫といふ社會的事實をなくしてしまふことが出來るでせうか。私どもは賣淫といふ外的現象をなくさうとして、どんなに努力をしても、その方法が單に、現象の上にばかり向け

られて、根本的な原因に向けられない限りはどうしても不可能な事です。私どもが、もし、ホントに、自己の一時的な興味や、センチメンタルな他人に對する憐みの情からではなく、内からあふれる正義の念と社會惡に對する嫌惡の情とから出發するならば一時的手段と僞善的とをすてゝ、賣淫の根本からの原因をよく研究して、これを撲滅してしまふことにつとめなければなりません。

それならば、賣淫といふ社會的事實の原因はどこにあるでせうか。賣淫を歴史の上から見れば、古代ギリシヤ、ローマの宗教的賣淫を初めに見ます。しかし、私どもの、今問題とするのは、そんな歴史上の事實ではなくて、現在の資本主義制度の下に行はれてゐる賣淫が、どんな原因によつて起るだろうかといふことであります。私どもは、この原因を供給と需要の方面から觀察することが出來ます。賣淫が、一つの商的行爲である以上、この二つの方面を具備しない以上は成立しないからであります。

資本主義制度の發達と共に、だん／＼大仕掛けの機械が使はれるやうになり、そのために、いままでほどの勞働者がいらなくなり、また、その生産費を少くするために、より安い勞働者を求めるやうになりました。これが、産業に多くの婦人勞働者と小兒勞働者とをみちびき入れる動機となりました。かうして婦人勞働と小兒勞働とが安價と屈從性とによつて資本家に歡迎されるやうになりました。この事は男子の勞働者が資本家に雇はれる時に非常に不利益なことをもたらしました。何故なら勞働者は自分が失業しないためには婦人勞働者と小兒勞働者と同じやうに自分の勞銀を低くしなければならなくなりまし

た。そればかりでなく、たとへ勞働者の賃銀が表面上高くなつたとしても實質上は勞銀のひくゝなることになつてゐるのです。それは勞銀が高くなるよりも、ずつと早い勢で物價が高くなつてゆきますから、少しばかり賃銀が上つてもまへよりらく生活をする所ではなく却つて苦しい生活に落ちてゆきます。

この現象は資本主義の發達と共にますく烈しくなります。かうして勞働者は到底ブルジョアが想像出來ないやうな悲慘な生活を營むやうにさせられます。そして勞働者の妻子は止むなく働きに出かけなくてはならなくなり、過去の樂しい家庭は失はれてたゞ共同の炊事場の樣な家庭になつてしまひます又勞働者の賃銀の低いと云ふ事は結婚を不可能な事ゝし、獨身者を多くします。然しその獨身者の動物的本能、即ち性的衝動は何處かに出口を求めずには居りません。こんな慾求は表面は社會的拘束によつて一時はおさへつけられても、異性の性的誘惑に對して敏感となります。これが今日の賣淫を求める一原因となつて居ります。

勿論私達は他の原因として男子の性的放逸、性的贅澤と云ふ事を考へに入れる必要があると思ひますけれど今は之を考の中には入れません。これは資本主義制度によつてもたらされたことではないから。

一方賣淫が供給されると云ふことに就いて考へてみれば資本主義經濟的の制度の發達が如何にして婦人を賣淫に走らせるかがよくわかります。始めは小遣錢取り位のために勞働に從事しましたが、その事は男子の賃銀をひくゝし、從つて獨身の男子を多くし、ひいては婦人の經濟的獨立、即ち結婚の延期又は不可能と云ふ事をもたらしました。この經濟的獨立とは婦人が自已解放のためにした事ではなく社會的條件即ちその親がその子を充分扶養することが出來

なくなつたからです。然しこれは後には婦人の目覺に大切な要素となり、婦人解放上無くてはならないものとなりました。始めは强制された婦人の勞働と云ふことが私達婦人に取つて大切な永久性のものとなりました。

しかし資本主義は家庭から離れて孤獨となつた婦人の生活の安定をはかつてはくれません。あのおそろしい時々の恐慌、即ち不景氣はたくさんの男女の勞働者を路頭にまよはせます。

かうして婦人勞働者は賃銀の廉價と共にます〳〵その生活をおびやかされ遂に最後の道へ逃げ込んでゆきます。死と營養不良とに面した婦人に取つて賣淫は最後の避難所です。資本主義は婦人に賣淫を暗示せりと云ふ謗に誰が答へ得るでせう。前に云つたやうに需要者である男子は賣淫の性的誘惑に對して敏感な立場にあります。こゝで需要供給の二つは成り立ち賣淫はこの資本主義社會では必然的に生じて成る社會制度の一種となりました。

今まで述べたことによつて賣淫が資本主義制度に根强く原因してゐることが解つたと存じます。私共が賣淫制度廢止のためにすることは、たゞ資本主義を倒すことによつてなされるのです。これは資本主義の害惡の下に生じて、これより自己を解放しやうとする無產階級の運動と一致します。

賣淫制度の害惡に苦しんでゐるのは婦人ばかりではありません。單に婦人の恥だとか國の恥だとか云ふ理由でなしに私達は社會の存續種族の保存の爲に、賣淫を滅亡させる爲に鬪はなくてはなりません。

無產階級解放運動のみが、この解決の鍵を握つてゐます。眞に自覺し、婦人の尊嚴と種族の保全を望むものは、資本主義の弊害を除き去る無產階級の戰列に加はらなければならない筈であります。

法律顧問

片山哲

（問）私はある工場の女工ですが、夜學に通つて勉强をしてゐるといふ事を口實に、工場主から解雇されました。この處置に對して如何にすればよろしいでせうか（本所一女工）

（答）夜學勉强を口實に解雇するなどゝは不當極まる事である。これこそ實に不當解雇と稱すべきもので、あなたは大いに其の權利を主張しなければならぬ。とは言ふものゝ、あなたには、取り立てゝ並べる程の權利は、實際の所無いのである。あなたに限らない、解雇職工と手當の問題については、我法制上職工は全然機械が奴隷の如く取扱はれてゐるのである。元來これに民法雇傭法の規定を適用せられるのであるが、それによると第六百二十七條に『當事者が雇傭の期間に定めない時は各當事者は何時でも解約の申入をする事が出來る、この場合、雇傭は解約申入後二週間を經過したるに因つて終了す』といふ意味の規定がある。理由の如何を問はず、工場主は二週間の宣告期間をおけば何時でも自分の工場に働ひてゐる職工の首を切る事が出來る其れては少しも理由を問はない。といふ趣旨である。この場合あなたは、工場主に對し僅か二週間分の給料を貰ふ事が出來る權利があるに過ぎない、夜學校に行こうが、芝居へ行こうが、郷里へ歸ろうが、そんな事は頓着しない、何んでもかんでも二週間分さへ支拂へば總ての理由を消滅せしめるといふのが我民法の規定である。不當解雇による手當金の請求、其れが唯僅かに二週間

分の賃金、何んと不當な法制ではないか。

(問) 家主は私共に對し六ヶ月の期間を定めて家屋明渡の內容證明をなして參りましたこれに對してどういふ返事をすればいゝのでせうか。(本鄕　松子)

(答) 家主が自分の所有家屋を自由に處分する事は、法律上正當な事として許されてゐる。誰れがはいつて居ろうと、誰れに貸してやろうとそんな事を少しも考へず之を改築し、賣却するの自由を許へされてゐる者である。それゆへ今度大變いゝ借り手が出來たからとか、或は新築して商店式に建て變へれば、莫大な權利金をとる事が出來るといふ考への下に現住者に對し立退を迫る事が非常に多いのである。法律はかゝる家主に對し、六ヶ月の猶線期間をおけば何等の理由なくとも、店子をたゝき出す事が出來ると規定して、この六ヶ月の期間さへおけば、何等の理由を示す必要がないのである。斯様な有様故、あなたは適法の手段によつて明渡の請求をなして來た家主に對しては正面から對抗する事が出來ない、たゞ六ヶ月の期間を經過しても出ない時には家主は家屋明渡の訴訟を裁判所に提起しなければならぬ樣になつてゐる。訴訟の結果敗訴すれば、今度は嫌おうなしに立退かなければならぬ。色々六ヶ敷しい問題があるので斯様な場合は專問家に聞ひてから內容證明の返事を出す事にしなさい、自分獨りで勝手に返事を出すと危險だ。聞く人がなければ期間がきても返事を出さぬ方がいゝと思ふ。

(問) 私の親族一家は被服廠跡で震災の際燒死一家全滅になりましたがこの家は斷絕でせうが又再興出來るのでせうか(深川〇〇子)

(答) 斷絕しやうと、再興しやうと、親類方の御意見次第である、其の一家に財産があれば、其の財産は一家斷絕となる曉に、國庫に

没收されてしまう故、大抵の場合は、再興の方法をとつてゐる。それであなたは先づ第一に其の一家の相續人を選定するために親族會を開くための許可申請書を裁判所へ出し、其の決議によつて親類の中から誰れか一人を其一家の相續人を選定し、其後選定相續人が再興（法律上は再興といふ言葉を用ひない）する事になるのである。一家全滅といふ氣の毒な場合であるから、右様の手續をとる事をおすゝめする。

（問）工場法の職工又は遺族扶助料金につき御敎へを乞ふ。（向島　一寡婦）

（答）これに條文を擧げて見ればよく判明する事だから條文を列記する。

第七條　職工の負傷又は疾病治癒したる時に於て左の各號の一に該當する程度の身體障害を有するときは工業主は左に掲ぐる區別により扶助料を支給すべし

一、修身自用を辯ずる事能はざるもの、賃金百七十日分以上

二、終身勞務に服すること能はざるもの賃金百五十日分以上

三、從來の勞務に服すること能はざるもの、健康舊に服すること能はざるもの又は女子の外貌に醜痕を殘したるもの、賃金百日分以上

四、身體を障害し舊に復すること能はずと雖も引續き從來の勞務に服することを得るもの賃金三十日分以上

第八條　職工死亡したる時は工業主は遺族に賃金百七十日分以上の遺族扶助料を支給すべし

第九條　職工死亡したる時は工業主は葬祭を行ふ遺族に十圓以上の葬祭料を支給すべし

以上の様な規定であるが、實例として、規定以上の扶助料を出した場合がない、死人は場合に僅か百

七十日分位いを貰つても、殆んど何んの役にもたゝない。

(問) 職工の賃金は差押へされるものでせうか。(神田かめ)

(答) 全然、差押をする事が出來ません。ここにいふ差押は債權差押と稱すべきもので、債權者は工業主に對してあの賃金を支拂ふべからずといふ命令を裁判所から貰ふといふ方法である。これは民事訴訟法第六百十八條第六號に明記せられてゐることで、その文句は『職工、勞務者又は雇人が其勞力又は勞務の爲に受くる報酬は』差押をする事が出來ぬといふ事になつてゐる。賃金に對して差押を許しては全く世の中は暗黒である。

(問) 雇人の給料などゝいふ者は、何時迄も請求しなければ消えるものでせうか(A)

(答) 雇人の給料も一つの債權だから、ある一定の期間請求しなければ消滅してしまうものである月給又は日給などは一ヶ年間請求せずに打捨ておくと、遂に消滅して請求權がなくなるものである。

(問) 親類の赤ん坊を貰つて私の家の養子といたしたいのですが、如何すればよろしいでせうか。(麹町よし子)

(答) 赤ん坊は何等法律上の行爲をする事が出來ないから、其子供の父母と養子縁組の手續をすればよろしい。子供の父母は子供に代つて縁組の承諾をする事が出來るといふ事になつてゐる。現在の手續は左様になつてゐるけれど、私はこの法律解釋に對しては全然反對である。赤ん坊の養子縁組は法律上出來ないものだと確信してゐる。父母が代つて承諾を爲すなど、そんな不當な事があるべきでない。判斷能力のある子供が養子縁組をしたいが、しかしまだ法律上無能力だから(二十歳まで無能力者)代つて父母が承諾をするといふのならばよく筋道がとほる。私は赤ん坊の養子縁組は不法のものと信ずる。あなたに對しても、お止めになる事をすゝめる。

世界の婦人

○婦人タイピスト協會生る●

タイプライター發明五十年年祭を記念して今度、婦人タイピスト協會が組織されることになつた。同會は丸の内の外語協會に事務所を置き、古株の婦人タイピストが幹部となつて、タイピストの意志の疎通を圖ること、タイピストの職業紹介等を仕事とするものである由。尙三月二十九日に、帝國ホテルで婦人懇談會を開くと云ふことである。

○婦人參政運動近況

婦人參政聯盟研究部では、二月二日から女子法律講座を開き、聽講無料で一般婦人に解放して、松本重敏博士の憲法民法の講義をきゝ、政治智識の普及をはかつた。

同聯盟は又、二月十二日、神田佛教會館で婦人參政演說會を開いた。阪本、長谷川、西川等の諸女史出演。當夜の收入は、婦人參政を標する高木前代議士の選擧費に寄附する由。

婦人矯風會に於いても、四月、岡山市に開かるゝ全國大會には、今度總選擧には婦人參政又び廢娼運動に讚する候補者に應援せんことを決議するさうである。

○婦人及び子供に對する施設、

今度赤羽橋畔に開かれるフランスより寄贈の天幕病院では、普通の病人の他に、虛弱な小兒を入院させることになつた。即ち營養不良兒や、弱い子供を嚴密に診察してそれらの病氣の原因を探り、三週間を一期間として入院加療して營養や元氣を回復させやうと云ふ試みである。今回都下各所の萬人の弱い子供の中から選ばれた二百人の小兒が入院することになつた。此の種の施設はいくら出來ても足りない樣だ。

婦人授產所は、今回更に千駄ヶ谷町及高田町に新設される。

○勞働總同盟の婦人部

二月十日から十三日まで開かれ勞働總同盟の大會で、婦人部設置の件が議せられたが、關東、關西各部婦人部の聯絡を圖つたり、運動方針を立てたりするために尙一年位の準備時代を要するであらうとの理由で延期されることになつた。

○勞働黨內閣と英國婦人。

數日前の外國電報によれば、一九一八年に制定された選擧法に對する、勞働黨議員アダムソン氏の修正案が、二八八―七二の多數で第二讀會を通過したさうである。

この修正案によれば、今までの婦人參政權に對する年令の制限(三十歲以上の婦人と云ふ)が廢され、一般選擧區に於いては、男子同樣、同一に六ヶ月以上住居する二十一歲以上の婦人はすべて選擧權を有する事になる。

又勞働黨內閣は、婦人參政權の擴張のみならず、茶及砂糖の稅を減少する事によつて日常生活を幾分樂にすること。戰死者の寡婦に年金を下附すること。等によつて婦人に味方するであらうと期待されてゐる。又同政府の重要問題たる失業救濟策か成功すれば、多大失業婦人の苦惱も幾分緩和されるであらふ。

○ドイツ婦人の政治法活働。

一九一八年の革命後に制定されたドイツ共和國憲法にあつて、二十一歲以上のドイツ婦人はすべて、完全の參政權を與へられたのであるが爾後、各階級の婦人はそれぞれ政治的團體を組織して政治運動に活動してゐる。

有產階級の政治的團體の最主要なのは「ドイツ婦人聯盟」と稱して、九十萬人餘の會員を擁してゐる。機關紙として「婦人」及「國內婦人」を每月一回發行し、又數名の婦人議員を出してゐる。この團體にかなり保守的な婦人か多いと云ふことである。

◎無產階級婦人の團體としては「ドイツ社會民主黨」及ドイツ共產黨の婦人部が擧げられる。前者は昨年獨立勞働黨婦人部と合して黨員二十萬人餘を有し、機關紙「平等」に隔週に發行される。共產黨婦人部は、有名な革命家、リララツエトキン女史、フイツシヤー女史等を有する革命的團體で會員は三萬餘、機關紙「共產婦人」は三萬部を發行されると云ふ活働的無產婦人を多數に擁してゐる。近時國際的運動に特眼ましい活働をしてゐる。

紙鐵砲

Tom

▲私は或る代議士のところへ女中奉公してゐたものですけれど、代議士つてどんなものかといふ正體をあきらかにして私はすつかり厭になつちやいましたの。代議士といふ看板が利權をあさる道具でつまり商店の看板より儲かることにおいて有効なんですわ。だから選擧に數萬圓を賭けても、差引損はないといふのですものね。それに選擧も、遊戯心理と、名譽欲から狂奔するので、民衆の生活なんてこれつぱかしも考へちやゐませんの。そんな代議士を相手にして、つまりその尻馬に乘つて婦人參政運動なんて騒ぐものはなんて馬鹿氣たことでせう。世の婦人參政權論者よ！私のやうに一度女中になつてみてから、はじめて眞の女權運動が生れるでせう。（一女中）

▲婦人と勞働、ほんとに私はうれしくてなりませんのそれにつけても私たちの文化的運動はなにが一番いゝでせう。さう〳〵、英國では十八歳から婦人に選擧權をあたへるんですつてね。日本の十八歳の女は如何うでせう。まアねえ、自分で自分の惡口言ふやうですけれど、耳かくしと、白粉に浮身をやつしてゐる可愛い、愛すべき無智なお人形さんですわね。選擧權の獲得、どこをたゝいたらそんな音が出るでせう。情けなくなりますわ。だけど、生活から出發して、敢然と立つことの出來るのは私たち職業婦人ですわね。堂々とした女性の文化運動として、一つやらうぢやありませんか皆さん（タイピスト　いさ子）

▲傳統と奴隷——此問題を眞實に

わたし達が考へてゐるてせうか。

わたしはね、一度は結婚しました。そして今、再婚の話が持ちあがつてゐますけれど、最初の結婚も、再婚も、わたしにとつては、傳統にしばられて、强制的に奴隷にされるのです。女の魂は、男性に對して、ながい間解放の叫びをあげてゐるのではないてせうか。ですけれど現實の問題として、いろ／＼な悲しみと惱みをとりのぞくことが出來ませんのね。(はな子)

▲職業婦人のうちに、公娼がはいるか、はいらないかといふ問題は別として、わたしは眞劍に公娼の問題を考へてみたいと思ひますわ公娼となる女性は、大部分生活からですね。その生活といふのはつまり無産階級だからですわ。公娼の制度があるから公娼が存在するのでせうか制度が存在するからこいふのなら、どうしてその制度を失くすることが出來るでせうか。

現在のブルジョア代議士を相手に、ブルジョア政治を相手に、どうしてそれが出來るてせうか。ブルジョア政治はあらゆる奴隷の上に建つてゐるのですもの。私たち女性はどん底から考へなければなりません。(かね子)

▲親愛なる皆さん。わたし近頃不可解なことがありますの。文士つて一體、世の中にどんな位置を占めてゐるものなんてせうか。ほらあの久米正雄といふ失戀文學者の結婚を、何故あんなに新聞なんかてさわいだのでせう。また、あゝして、新聞の材料になるのは、久米といふ男が恥しくはないのてせうか。眞の文學者といふのは結婚を廣告して有名になるものてせうか。妾はその新夫人が、どんな素性であつたなどゝいふことで問題にしてゐるのではありません。妾はあんな文學者が、日本で持てゝ

い丶氣になつてゐるかと思ふと腹が立つのですよ。妾たち職業婦人のためにほんたうに明るみをあたへてくれる、立派な文學が出ないのでせうか。新興プロレタリヤ文學は如何うなつたでせうか。職業婦人が團結してブルジョア文士に挑戰しては如何うでせう。今の婦人雜誌の廣告を見てさへ妾は憤慨にたへません。(文學愛好とし子)

▲『ツトムちやんや、おとなになつたら、母さんに孝行するのよ。』生れて七ヶ月の子どもをあやしながら妻は何氣なくかう云つた。すると『馬鹿なッ、冗談にもそんな親孝行なんてことをいふ母親に、俺たちの子どもの養育は委せられないぞ。』と夫は眞面目な語氣で妻をたしなめた。(咲子)

▲某女子大學生が△△△大學生と戀に落ちて遂に情死したといふ事件は當時の三面記事欄を賑はした。

それに就いて某女子大學校長が泣きながらの申譯けはと聞くに、先代の校長時代にはかうした事件は一度もなかつたのに自分の代になつてからこんな不始末な生徒を二度も出すとは自身の不德を恥づると共に學校の名譽に對して世の中に對して相濟まぬのだと云ふ。

また、過般某女子體操學校の生徒の自殺事件の際にも、校長なる婦人は、今までこんな不心得な生徒は一人もなかつたのに、學校がせつかく隆運に向いた矢先に學校の名を汚した、社會に申わけないと訪問記者に語つてゐたやうだ。

教育家といふものはかうも揃つて殘虐なハートの持主になり得るものだらうか。校則本位、迎合、事大のミイラは彼等の名である。しかし私共は彼等を責めるに專念てあつてはならない。彼等をしてミイラたらしめた大きな桎梏は何か制度か、組織か、其所を見極はめてミイラの因る所を明らかにする(ことを忘れてはならな咲子)い

自慢咄

藤森成吉

いや、此のごろは全く口八丁手八丁さ、大童の働きぶりだ。

僕は勿論書く事こそ本業なれ、しやべることなどは夢にも自信はない、無理に頼まれればこそ、三度に一度、五つに一つはあつちこつち講演に出るもんの、内心閉口し切つてゐる次第だ。

だが、それでもかなり意味はあると思つてゐる、嘗て社會主義同盟へ入つた時、社會主義者になるなら、まづマルクスに負けない位な論文を書いて見せてくれ、それとも、どこかへ爆彈をほうり込んで見せてくれイ、なんぞと、大分愉快な追ひ註文を四方から受けたが、そんなドえらい眞似をしなくとも結構安心立命の境地がある。

一つ、講演の自慢咄でも聞かせやうか。

もう一昨年になるが、夏の初め高知へ行つたことがある、いろんな用事で高知新聞社へ厄介になつた代り……と云ふわけでもないが、とうとうその社の文化講座第何囘目かの講師として、高知市の公會堂で一夕しやべらされた題は「理性的進化と婦人」。僕はコムミユニストだが、その時はクロポトキンやプルウドンを引いて二時間はかり話した。

題からでもあつたが、澤山婦人が來た、半數以上若い女の人達と云ふ盛況だつた。さすが維新以來の志士の血を引いて、あすこには今も活潑な氣運が動いてゐると見えるね。

さて話變つて今年の春四月のことさ、どこからやらの歸りに、本郷の或るちよつとしたミルクホールへ寄つて溫い

ミルクを飲みながら、何氣なくテエブルの上の週刊朝日か何かひろげたと思ひ給へ、ぼんやりペエジをめくつてかくと、ふと「地方女學校だより」とか何とか云ふ欄に眼がとまつた、高知市の女子師範學校本年度卒業生……と云ふ冒頭の文句に感心にもすぐと注意を惹かされたのだ。

よんで行くと大變なことが書いてある。

今年の卒業生達に對して、教師が「學校について思ふこと」「今後世に處して行く方針」なぞと云ふ問題を出して見たと云ふのだ、ところがその答案が甚だふるつてゐる。

「在學中、諸先生から鑄型にはまつた教育を授けられて、お蔭でこんな平凡な人間になつたことを厚く御禮申します」だの、

「私は、卒業後はクロポトキンの踏んだやうな道を歩いて、大いに社會問題の爲めに盡くして見たいと思ひます」だの、然もそれがごれこれもと來てゐる。

さあ先生達びつくり仰天、飛んでもない卒業生達だ、こんな人間を學校から出してやるわけには行かない、……と云つて、今さら卒業證書を取り消すわけにも行かず、大まごつきの大あわてを演じてゐると云ふ記事だ。

そいつをよむと、僕は思はずミルクのコップを擧げたね、痛快だとばかり――。

勿論僕は一昨年の夏の旅の日のことゝ思ひ出したのさ、その時、夜分にもかかはらず殊に大勢師範の女生徒諸君が來た、今年卒業する人達と云へば、丁度それに當つてゐる、我が叛逆演説の効果を見よ……とさ。

さア僕の推量どほりか否か、それは知らないが、これが取つときの自慢咄さ。

爭ひのあと

鷹野つぎ

道が眞直ぐについて居たから、かつ子はその通りに歩いて行つた。激昂が俄かに鎭つてくると、いまは視覺からくる詰らない感じのみが、頭にのぼつてきた。

第一に薄黒い土の上に、水溜が汚なくできてゐて、草履の裏に滲みつきさうなのが、厭はしく思はれてきた。可成り道幅が廣かつたから、兩側の家並みがかつ子の額よりは低く思はれた。それにいかにも郊外の場末らしい灯の乏しいのも、ふと今始めて見るやうに身に泌みた。

空には星があつた。やがて道は街の解をゆるい隨線で左に折れて益々暗く、そして彼方の家並みは遠い夜空のうちに消えて見えなかつた。

それが直ぐ街の出はづれであることを思はせた。

かつ子は此の道を左に添つて歩けば、車で河の橋のたもとに行きつく事を知つてゐた。彼女は自分は河の方へ行くつもりなのか、何んのために一散にこちらを向いて歩いて來たのか、といふことがふと考へられた。

何んとも云へない無氣味なふるへが、身内を走つた。でも彼女の足は止まらなかつた。彼女はとぼ／＼と歩みをつゞけながら、今の先き正吉と思はぬ口爭ひをして腹を立てた自分が思ひ出された。

『あなたは何故二言目には、そんなに怒り出すのでせう、私は靜かに云つてるではありませんか。』
自分はあの夕食後餉臺の片端の方に坐つて、睨みつけるやうに此方を見つめてゐた正吉の方へ云つたはずだ。だが、
『馬鹿！。』と、正吉はすぐ怒鳴り立てた。『正一を考へないのか？　お前には母親だといふ考へがないのか？　第一それほど不滿があり、自分といふものが大事ならば、何故文句を云ふ前に、そのお前の信ずる通りに處決しないんだ？。』

　自分はその時心の底から、腹が立つた。そんな事を今さら聽かうとは思はない。自分はたゞ退屈なのだ。子供を守りし、毎日〳〵變らない家の雜事の中に暮らしてゐる。しかも眼の前には堂々として生活のしろをうるために、働らいてゐる正吉がゐる。それも共れだけで事なく濟まされてゐるといふのならばよい。が事實は自分が退屈を忍び、正吉が勞苦に堪えてゐるほど。生活は少しも良くなつてはゐないのだ。これが我々の結婚生活といふものか？だが、これでどうしたならばいゝのだらう。こんなことでは仕方がない、と自分は考へてるだけだ。

　自分は思はず涙ぐんで、うつむいた。誰れを恨むつて恨む相手はないのです、不滿はそんな處にはないのです。と自分は心の中で呟いた。

　それどころか自分は、自分として此の一字のために一文の働らきも爲しえないでゐることが、あなたに酷い重荷を背負はしてゐるやうな、氣さへして居るのです――。それから自分は口へ出して、彼れの激怒に答へた。
『みんな私が意久地がないからです。』

　もつと溯つて此の口爭ひの起りを云へば、矢張り此のどうにもならない自分の行き詰つた氣持ちが祟つてゐたのだ。

『まあ、何時までこんな日が續くのでせう。』と、自分が始め正吉に云つた。
『そのうち目鼻がつくさ。まあどんなに高く見積つても今月いつぱいだ。前の方のが整理さへつけば、既う先々はら

くだよ。』
『ですけれど、今月いつぱいも、毎月の話ぢやありませんか、どうしたものでせう。』
そして心の中では金にこと寄せて、自分は一體何を云つて正吉を氣拙づくさせてゐるのだらうかと考へた。そんならば此處に誰れか家計の整理がつくだけの、補助を與へて呉れる者でもあつたとしたらどうであらう。自分はそれで申分なく暮して行くことができるであらうか。
どうにか事なく其の日が濟んで行けさへすればと思つたのも、斯う考へてゆくと決して本當ではなかつた。自分が思はず、自分たちの毎日をふりかへつてみた。だが何んといふ驚くべき變り方であらう。つひ二年前までは彼れも自分も、若々しい青年であり、娘であつたのだ。自分たちは行はふと思へば何事でもする事のできた人間であつたのだ。
自分は正一を思ふ前に、母親である事を思ふまへに、其の事を思ふために云ひがたい重苦しさを忍んでた。せめて其の日に事かく、缺かぬよりもちつと自分を働らかさなければならぬ、といふ思ひがした。またそれは自分が正一を思ひ、母親であることを思ふのと何んの差し障りもない考へではないか。
自分はその時詰局自分といふ人間が、何處か小さくまとまり偏つて行くやうな卑屈な氣持ちを抑へることができなかつた。
『お前には貧しいといふことが、そんなに堪えられないのか?』と、正吉がしばらくしてから云つた。
『まあ、何を云ふの、私はたゞ私たちが餘りに慘めだと思ふから云ふのですわ。』と、自分は腹を立てて直ぐ云ひかへした。『こんな事なら私に何かさせて下さい仕事をさせて下さい。』
『何を云ふのだ、子供を抱へてそんな事ができると思ふのか。』
自分はちよつとそこで云ひつまつた。それなりで默る事はできなかつた。
だつて出來ないと云つたつて、此の儘ではどうにかならないではありませんか。私はもう我慢ができない。』
正吉はそれを聞くとさつと顏色をかへた。彼れのまだ若々しさを害ねられぬ厚い額の髮はそのとき横なでに忙しく

掻き上げられた。
『それではお前の云ひ分は、いかにも僕が意久地がないと聞えるではないか。此の僕が妻子を養ふこともできないと』
『まあ、そんなにおこりになるなんて！たゞ私は自分がさうしたいと思ふことを云つたまでですわ。』
『もう云ふな！。』と正吉はまたもや激怒に駈られたやうに聲をあげた。
『もう僕は何も云はない、お前は僕と子供とから距れて一人になつてみたいんだらうでは勝手にしてみるがいゝ。』
彼れは然う云ひさすや、愕ろいて居る自分を見棄てて立ち上つた。そして傍らで無心に玩具のおねぶりと遊んでゐた正一を抱き上げると、父親らしい笑顔を見せながら『正ちやんええんええん行かうね。』
で、彼れはそのまゝあとをも見ずに、ぷいと出て行つてしまつた――。
斯うした争ひのあとさきが、いま瞭りと彼女の心に呼びさまされてきた。そのとき其處にはたゞ食べ荒した食器がごた〳〵と餉臺の上に置かれたまんま、かつ子と共に佗しくとり殘されてゐた彼女は長い袂を顔に當てて一人で啜り泣いた。

『自分は彼れを怒らしてしまつた。もうあゝ云ひ出されたからには、どうすることも出來ない。謝まることは出來ない。もうそれはできない。』
彼女は然う一途に思ひきつた。あの正吉の激怒と同じ抑へかねる勢ひで激しいものが、さうしてすゝり泣きながらも彼女の若い身内を駈けめぐつた。で、思はずも彼女はふら〳〵と立ち上つて、食器のあと始末もせずに、表へ出て來たのであつた。
あの時出る時の小走りの勢ひもだれて、今はとぼ〳〵とT河の畔に近づいて居た。其處にはたゞ一つアークライトの光りが高々と月明りのやうに蒼白く輝いてゐるのが見えた。
橋畔には數へるほどの人影もなかつた。川岸の土堤の草叢には、最早霜枯れをすだく虫の音さへ聞えなかつた。全

く人家から距れた此のあたりはたゞ對岸の家々に小さく灯の影が窺はれるといふばかりで、寂莫そのもののやうにひつそりこしてゐた。

彼女は云ひやうのない寂しさに襲はれた、夫もない、子供もない、家もない、況して彼て自身の願ふ何ものもないと思はれたのは、此の時、この寂しさの思はせるすべてのものであつた。

彼女は冷たい河風に身をふるはせながら、暗い土堤の方へ傳ひ歩いて行つた。そこでは何處から落ちてくるこも知れない薄い光りのために、處々川面が銅鐵のやうに、或ひは蛇の肌を思はせるやうに、氣味わるく明滅して見えた。かつ子はその川面をぢつこ見下ろしてゐるこ、或る夏の夜正吉こ連れ立つて、あのT橋の上から戯れに小石を幾つこなく投げ入れて正一を喜ばせた事を思ひ出した。あの踊るやうな元氣な流れを見せてゐた川面もいまは觸るれは堅い鐵板でもあるやうに鈍く音もなく靜まり返つてみえた。

彼女は足元の草の間から、手探りに小石を一つ拾ふこ、思はず腹立しさうに、力をこめて投げ込んだ。それはしかしスポリこ水を切つて、何んの手應へもなくあたりの水さへ騷がせずに沈んで行つてしまた。

かつ子は瞬間ごつとしてす肩をすくめた。同時に彼女を此の凄まじい河邊にまで一途に斷らせたあるものが、明るく掻き立てるやうに、彼女の胸に嗤笑を投げつけるかと思はれた。

『まあ、なるほご此の馬鹿さは――。』こ、彼女は自分を馬鹿こ呼んだ正吉の言葉を、此處で全く氣持ちよく思ひ出しながら、笑ひ出した。

『自分は彼れを怒らせ、自分に腹を立てさせて、それで何も彼も失くしてしまつたこ思つたのだ、それが斷けさせたのだ。』彼女は然う思つた。

かつ子は引き返しはじめた。それは極めて早い足ごりでアークライトの明るい光りの下へ、人字の方へ街の方へ飛ぶやうにつゞけられた。

彼女は道々乳に飢えた正一を思ひ浮べては、俄かに湧きあふれてくる乳房の痛みを感じた。茶の間の食べ荒した食

器の事を思ひうかべては、それが一時も早く満められるやうにと、彼女をせき立ててるかのやうに思はれた。

かつ子は街の方へ折れやうとする四つ角のところで。ふと一つの露店を見つけると、足をゆるめた。それはいかにも溫かい良い香りを立ててゐる、鯛燒屋の店であつた。持合せの乏しかつた。彼女はせめてその溫かいと云ふのが正一たちを喜ばせる何よりのものだと思はれたので、急いでそちらの方へ近づいて行つた。

見るこ思がけなくその露店の主といふのは、背に乳呑兒を拈りつけて中年の女であつた。すぐその彼女の傍らには七歳ばかりの女の兒が居て寒さうに首をすくめながら、何かと母親の指圖に從つて動いて居る。

かつ子はその母子のまゆ〳〵しい姿にうたれた。

『あなた。むいくら?。』と、女が大きな前髪の若い女の姿をみると炭火にほてつた頰を上げながら云つた。

『では出來たてのあつたかいのを。』と女は再び忙しげに斯う云つて、一袋をかつ子の手に渡した。

彼女は受けとつたのちも突嗟には立ち去りかねた。それほど此の母子を見る事によつて受けた、彼女の自嘲は深かつた。

『上には上がある。』彼女は思はず心の中で呟いた。同時にそのとき心が自分の生活の方へ、非常に柔らげられ満ち足りて注がれてゆくのが思はれた。

賛助員になつて下すつた方々

青野季吉
秋田雨雀
芥川藤市
有島生馬
青柳すゞ子
足助素一
安部磯雄
新井休作
今井三郎
板倉勝忠
伊藤久兵衛
猪俣津南雄
今野賢三
石本靜枝
稲垣守克
飯塚友一郎
石山六郎
生方敏郎
宇野浩二
梅山浪子
江口渙
榎本曽代子
岡田禮子
岡内籌子
尾本淑子
尾崎士郎
大山郁夫

大津知
小川未明
大泉黑石
太津恒子
大和敏子
大山廣光
萩原はま子
大内兵衛
岡本かの子
片山寛
河原さき
片山伸
加能作次郎
片山哲
川上愛子
春日庄次郎
河崎夏子
金子洋文
加藤武雄
喜治降一
葛城壽江
北昤吉
菊池寛
岸邊福雄
岸本市太郎
久保田明光
黒川小六

工藤のぶ子
倉光宗敦
小岩井ゆき
黄信徳
小林源太郎
小泉鐵
小牧近江
佐倉重夫
佐野常尾
佐々木明子
堺利彦
島中雄三
島中雄作
清水ゆき
志垣寛
鹽野きく江
鹽月學
鈴木三郎
末廣太郎
鈴木重吉
杉森孝次郎
瀬川昌世
關祇二
添田敬一郎
相馬泰三
曾野峻輔
田澤義輔

田村薫子
爲藤五郎
田中惣五郎
武井ふさ子
高山雅枝
田中貢太郎
高橋亀吉
高橋友治郎
高山辰三
高垣たか
高山まさ江
千葉亀雄
角田健太郎
垣川すゞ子
永井享
内藤貞子
中野春雄
中村英雄
中村市郎
中西濱太郎
中西伊之助
永戸
中田獅郎
野口久雄
植原久和代
長谷川時雨
馬場孤蝶

白鳥省吾
速水久子
林正雄
長谷川如是閑
廣津和郎
弘中政男
弘中みつ子
布施辰治
藤井悌
平野義太郎
二荒芳徳
春野信藏
鹽宮谷清松
本間久雄
本多ちよ
朴順天
細田源吉
細田民樹
松井靜子
前田河廣一郎
松川清
松下吉衛
三上於菟吉
三津木貞子
宮島新三郎
水谷長三郎
水守亀之助

宮坂安三郎
宮島麗子
三輪田元道
三輪壽壯
室伏高信
森田草平
源原とき
森田良雄
山川菊榮
山田正雄
山田勇一
山田敏子
山田やす子
矢熊章子
山崎今朝彌
山口氏門
山口よね子
山野千枝子
山本實彦
安成二郎
山田好文
吉田疑
横光利一
米田曠
横山あい
獵山政道
の諸氏（第一回分）

原稿募集

【論　文】十五枚位（四百字詰）
【時事批判】長短隨意
【創　作】二十枚位（同　前）
【感想文】詩歌、其他飜譯など

締　切　（毎月五日）

宛名は、職業婦人社内
「婦人と勞働」編輯部へ

▲編輯室より▼

□八月のパンフレット以後、災害の打撃をうけて、わが『職業婦人』が、ひきつゞき休刊を餘儀なくされてゐたことは、まことに遺憾でありました。こんど、みなさんの非常なお援助により、『婦人と勞働』と改題し、舊に倍した新らしい力を蓄ひ起して、こゝに再刊の運びにまで至りました。

□『婦人と勞働』は、社會問題解決のために協力しやうとしてゐる總ての人々のために生み出された機關なのであります。この雜誌が、志を同じうするすべての人々によつて育まれ、利用されるやうにと願つております。

□どうかみなさん！みなさんの一人一人が、自分の雜誌だと思つて育てゝいつて下さい。

□購讀者を募集します！同志の方は何卒購讀者を御紹介下さい。一人が五人宛紹介して下さるとしても、百人の同志に依て、五百人の購讀者が、立ち所に出來るわけです。

□職業婦人社の維持發展のために賛助員を募ります。賛助員は、向後毎月、誌代五冊分金壹圓以上の宣傳費を負擔すること、尚この際臨時に、資金を募つてゐます。全國の諸兄諸姉より御寄附を仰ぎ度くお願ひいたします。

□すべに賛助員におなり下すつた方々や御寄附下さいました皆樣に謹んでお禮申上げます。

□どうかみなさん！ふるつて賛助員になつて下さい!!（はつ）

定價

一部	金三十錢	邦税五厘
半ケ年	金一圓八十錢	不要
一ケ年	金三圓六十錢	不要

廣告料

特等	一頁	四十圓
一等	一頁	三十圓
二等	一頁	二十圓
	半頁	十圓

四回以上割引あり

御注文は總て前金で願ひます。
御送金は振替に御拂込み下さい。
邦券代用の際は一割增の事（五厘切手にて）。
誌代の領收書は別に差上げません
雜誌發送を以つてこれにかへます

大正十三年四月三日納本　第二卷
大正十三年四月五日發行　第一號
編輯發行兼印刷人　東京市外巣鴨町一〇一九　奥むめお
印刷所　東京市外下澁谷五三三　弘榮社
發行所　東京市外巣鴨町一〇一九　「婦人と勞働」職業婦人社
電話牛込二四九八番　振替東京六四一六〇

暑が訪れてまゐりました。しばらく休刊して居りました「職業婦人」は之ど「婦人と労働」と改題して体裁のお手入済ることになりました。

どうぞ前より一層御愛護をお願ひ致します。甚だお不用の小冊はお手数ながらお返送下さるやうお願ひします

婦人と労働発行所

職業婦人社

陽春飛躍號

愛と力

第一卷第四號

愛と力 發行所 あけぼの社
東京市外千駄ヶ谷町七四五
振替東京六六二七四番

大正十三年　月　日第三種郵便物認可
大正十三年四月五日發行（每月一回一日發行）

